

寿司

「へい、オマチ！」

威勢のいい声とは裏腹に、そつと置かれたのは握り寿司だった。正確には寿司より一回り以上は大きい、サーモンの切り身が乗った飯玉だ。こんもりと丸いそれを見下ろしながら、黒髭は訝しげに眉を寄せる。

「なんか丸くね？」

「うるさい。……なぜか、箱型にならないんだ」

そう言つてバーソロミューは調理台に視線を落とした。

スタンドに立ててあるタブレット端末には『混沌悪にもできる！ニギリズシの作り方』という動画がループ再生で流れている。講師役は紅女将と弓兵の赤色コンビだ。

「形つつか……酢飯は二十グラム程度つて言ってますがな。これどー見積もつても3倍以上あるデシヨ」

樂しげに二つ目の酢飯玉——もはやシャリとは言うまい——を握るバーソロミューを見ながら、黒髭はミニキッチンの仕切りに寄りかかった。

寿司を握りたい、とバーソロミューが言い出したのは今朝のことだ。これは、昨夜見ていたアニメに影響されたことは想像に難くない。調理場から道具類に、酢飯と数種の寿司ネタを

調達し、早速自室のミニキッチンで腕を振るい始めた。……寿司桶はともかく、よく寿司下駄までもがあったものだ。

手際に文句を言いながらも、寿司を握るバーソロミューを見ている黒髭の口元は、少しだけ上を向いている。

動画を見ながら酢飯を握る指先は、丁寧そのものだ。寿司酢まみれになった褐色の指先はてらりと光る。それが水を張ったボウルに飛び込み、軽くすすがれて。雫を落としながら出てくる姿に薄っすらと官能を感じてしまうのは、間違いなく惚れた欲目だろう。

黒髭がちよっとした楽しみを得ている間に、寿司下駄にはバーソロミュー特製寿司がもう一つ増えた。今度はマグロの赤身らしい。四角い刺し身が乗った酢飯玉が、先に置かれたサーモンと並ぶ。

「ほら、できたぞ」

握り終えたバーソロミューが、寿司下駄を黒髭へ示す。促されるまま、黒髭は醤油を上から垂らし掛け、大きく口を開けて頬張った。

「ん、ウマイ」

大きさはともかく素材はいいし、寿司酢の配合はレシピ通りだ。普通の寿司より大ぶりなので、黒髭にとっても食べごたえがある。何より、目の前で恋人が作ってくれるできたての手料理が不味いはずがなかった。

黒髭がグッと親指を突き出せば、恋人はその顔を綻ばせ日向を感じる頬は上気して屈託なく笑んだ。ワサビとは違う刺激が、黒髭の胸を詰まらせる。

「よし、次は炙り寿司だな！」

「ハイハイ、バーナー気をつけろよ……ってコラッ！プラスチックまな板の上で炙るな！！溶けンでしょーがああ！！」